

## 私の フィールド ワーク



個人が用益権を持っているサツマイモやキャッサバの畑（2010年2月）。

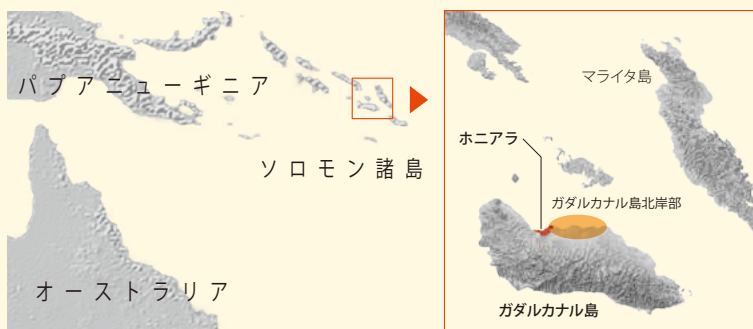
# 現地の「ありきたり」をみつめる

## 民族誌調査と平和研究のつなげ方

藤井真一 ふじい しんいち / 国立民族学博物館外来研究員

「平和である」とは、どのようなことなのか。

紛争後のソロモン諸島で行なったフィールドワーク中に  
気付いたことから、「戦争や暴力がない状態」とは  
別の切り口で平和について考える。



### フィールドワークを通じて「平和」について考える

ソロモン諸島ガダルカナル島。日本人には、太平洋戦争のときに日米が衝突した激戦地としてよく知られている。この小さな島でのフィールドワークを通して、私は「平和」について考えてきた。

「ソロモン諸島」あるいは「ガダルカナル島」の名前は、太平洋戦争との関わりで知られている程度かもしれない。しかし、戦後約80年が経った現在でも、ソロモン諸島には戦没者の慰霊や遺骨収集を目的とする日本人がかなりの頻度で訪れており、現在の日本人にとっても意外と身近な国の一つである。

このように述べると、日本人研究者である私が、かつての戦争の舞台となったソロモン諸島ガダルカナル島で平和の研究をしているということは、太平洋戦争に関する歴史研究を行なっているように受け取られるかもしれない。しかし、私が研究対象としてきたのは太平洋戦争ではなく、その約半世紀後に起こったソロモン諸島の人びと同士の間での紛争である。

### ソロモン諸島の「エスニック・テンション」

ソロモン諸島は1998年から2003年にかけて「エスニック・テンション」と呼ばれる紛争を経験した。「エスニック」（民族の）と形容されているが、いわゆる民族集団間の紛争と理解すべきではない。なぜなら、実際にはソロモン諸島を構成する2つの島（ガダルカナル島とマライタ島）のそれぞれにルーツを持つ人びとの中で生じた「島民間」の紛争であったからだ。紛争は、ガダルカナル島に移住して暮らしていた大勢のマライタ系住民をガダルカナル側の武装集団が武力で威嚇して追い出そうとしたことから始まり、のちにマライタ系住民が結成した武装集団との武力衝突へと発展した。

約4年にわたる紛争での死者数はおよそ200名である。当時のソロモン諸島国の総人口は約40万人なので、数字だけで考えると、世界の辺境の小さな島国における小さな争いであったと感じられるかもしれない。しかし、この紛争による国内避難者数は35,000人にのぼる。つまり、人口の約1割にあたる人びとが、それまで住んでいた



ガダルカナル島の首都ホニアラとその近郊には、太平洋戦争の慰霊碑などが点在している。写真は、2011年に行なわれた平和慰霊公苑の再整備完成記念追悼式の様子（左、2011年11月）とガダルカナル島北岸部で玉砕した一木支隊の鎮魂碑（右、2009年11月）。

ガダルカナル島北岸部の集落における現在の食事の様子（左は2018年3月、右は2019年9月）。基本的にはほぼ毎食のようにコメやヌードル、缶詰などを食べている。また、インスタントヌードルに付いてくる粉末スープは、野菜類の煮炊きをするときの重要な調味料のひとつである。



場所を離れて避難を余儀なくされたことになる。その中でも、特に多くの人びとが避難を強いられたのが、紛争の激戦地となったガダルカナル島北岸部であった。

この地域には広大なアブラヤシ農園とその搾油工場があり、当時の農園労働者の約7割がマライタ系住民で占められていた。彼らは自分たちの親族を大勢呼び寄せてもいた。そのため、マライタ系住民を島から追い出したいガダルカナル側の武装集団にとって、この地域は恰好の標的であった。しかし、マライタ系の農園労働者とその親族だけでなく、ガダルカナル島北岸部で生まれ育った人びとも、この紛争に巻き込まれることを避けるため、住んでいた場所を離れて避難したという。

ソロモン諸島の紛争に照準を合わせながらフィールドワークを進めているうちに、戦場となったガダルカナル島北岸部の人びとが紛争中にどのような生活をしてきたのかに目を配る必要性を感じるようになった。

平和や紛争について研究する場合、どうしても紛争を社会病理や非日常的な現象として特別扱いし、ことさらに注目してしまいがちになる。しかし、武力衝突が起きているとはいえ、その武力衝突の当事者は個々の戦闘員である。そして、それらの個人は休む間もなく戦闘行為に身を投じているわけではない。彼らもまた、生きるために食べるなどという当たり前の日常生活に身を浸しているはずだ。このように考えていく中で、私は、現地の人びとの「ありきたり」の生活、連綿と続いているように思われるありふれた日常生活の重要性をきちんと評価し、その「ありきたり」の生活をきちんと

と考慮に入れたうえで平和について考えなければならないと思いついた。

### ガダルカナル島北岸部での「ありきたり」

「エスニック・テンション」の激戦地となったガダルカナル島北岸部の人びとは、どのような日常生活を送ってきたのか。それを人類学的なフィールドワークから明らかにすることは、紛争という事象を下支えしているのがどのような諸活動なのかを見極めることでもある。そして、その作業は、紛争と平和とを従来のように二律背反的で断絶的なものとして捉えるのではなく、両者を一連のプロセスの中に位置づけて考察するための第一歩である。

このような気付きを得てから、遅ればせながら、私はガダルカナル島北岸部におけるありふれた日常生活に対して特に注意を向けながらフィールドワークを行なった。

ソロモン諸島の人びとの約8割は、いわゆる村落部で自給自足的な生活を送っているといわれる。ガダルカナル島北岸部の人びとの多くも例に漏れず、村落でサツマイモや野菜類の栽培を行なっている。それぞれの個人は、かなり広いサツマイモ畑を複数の場所にもっているほか、さまざまな野菜類なども栽培している。ところが、彼らの日常的な食生活を見てみると、コメやインスタントヌードル、缶詰といった購入食品が大半を占めており、決して自給自足的であるとはいえない。こうした食生活は紛争以前からよく見られる光景であったとの報告もある。彼らが栽培しているサツマイモや野菜類は自給自足のための食料ではなく、首都のマーケット



\*写真はすべて筆者撮影。

畑に仮設された小屋の様子(2012年7月)。現在でも、畑仕事に集中したいときなどに、このような仮設小屋を建てて寝泊まりすることがある。



戦争や暴力がなくても平和とは呼べない事態の一例。毎年のようにサイクロンが訪れるガダルカナル島では、上流で降った大雨によって河川が氾濫し、集落や畑が水浸しになることがしばしばある(2011年8月)。

トで販売するための換金作物という位置づけで考えるのがよいかもしれない。

ガダルカナル島北岸部の人びとのこうした生活状況は、次のような条件によるところが大きい。第一に首都ホニアラから車で1~2時間ほどの距離に位置していること、第二に国内最大のアブラヤシ農園があるおかげで、首都と農園をつなぐ幹線道路がきちんと舗装されていることである。これら2つの条件が揃っているため、ガダルカナル島北岸部は首都へと農作物を供給する立場にあるのだ。

### 紛争状況下における日常生活

紛争中、首都区画の境界線付近で、ガダルカナル側武装集団と首都区画側を警備・占拠していた警官隊やマライタ側武装集団が対峙したといわれている。この間、ガダルカナル島北岸部の人びとは農作物を首都へ売りに行くことができなくなるとともに、コメやインスタントヌードルといった食品を買ってくることもできなくなった。すでに購入食品が頻繁に食卓に並ぶようになっていたガダルカナル島北岸部の人びとは、それでも自分たちの畑から収穫される農作物を日々の食料として生きのびていた。

また、村人たちは「(自分たちの仲間であるはずの)ガダルカナル側武装集団の連中に食料を巻き上げられた」といった話をよくしてくれる。彼らによれば、武装集団のメンバーたちは農作業などせずに、地元住民たちを脅してサツマイモ等の食料を得ていたという。こうした関係を逆手にとって、武装集団に食料を提供することで紛争に巻き込まれること

を回避していた村人たちもいた。

それでは、住んでいた場所を離れて避難した人びとはどうだったのか。「この地域の住民の約6割が住む場所を失った」、「彼らはブッシュに逃げるしかなかった」などの報告がある。しかし、私の調査から明らかになったのは、彼らが口にする「ブッシュ」が、いわゆる藪やジャングル、内陸部の山地だけを意味するのではなく、集落から徒歩1時間ほどの距離にある自分たちの畑のことも意味しているということだった。親族などを頼って遠く離れた集落まで避難した者もいたが、ほとんどの村人たちは畑に小屋を仮設し、不安を覚えれば別の畑へと移動するといった行動をとっていたのである。このように、避難生活の中でも、彼らは食に関して危機的な状況に陥ることなく生活を続けられたのであった。

### 民族誌調査と平和研究のつなげ方

暴力的な紛争現象に照準を合わせつつも、周辺視野に映り込む「ありきたり」の日常生活を見つめることは、「戦争や暴力がない状態」として平和を捉えるような思考法に再考を促す。戦争や暴力がなくても平和とは呼べない事態はありうるし、逆に紛争状況にあってもいわゆる平和的な日常生活は営まれ続けている。戦争や暴力以外で平和を阻害するものが何なのか、現地の人びとがどのように日常生活を組み立てているのか、現地の人びとが「平和」をどのようにイメージしているのか。これらを、フィールドワークで得られた知見から示していくことが、民族誌調査と平和研究をつなぐことになるかと私は考えている。

